

東京と大阪のダイコトミー： アイデンティティ、ユーモア、社会言語学について

神戸女学院大学
VAAGE Goran (ヴォーゲ・ヨーラン)

日本国内におけるさまざまな地域的な特徴に関心を向け、それを会話の話題にする日本人が多くいる。この動向は、地域の名物料理や地元民の性格特性を紹介する読賣テレビ放送の『秘密のケンミン SHOW』などの高い支持を得ているテレビの娯楽番組を通じて経験することができる。次のような断片を見よう：

アナウンサー：「ノリツッコミ実験その二。『他ケンミンと話そう』という偽コーナーで電話の代わりにあるものを。」

取材者：「宮城県民の方と携帯でつながっていますので、ちょっと話してもらってもいいですが。」〔ナスを渡す〕

大阪人1：「もしもし。あ、もしもし。なすなす。」

アナウンサー：「ダジャレを入れてノリツッコミ。」

取材者：「沖縄の県民の方と今電話がつながっています。携帯電話です。」〔ナスを渡す〕

大阪人2：「これなあ。あ、もしもし。ちょちゅう。ちょつちゅうねー。あー。ちょつちゅう。おい。これなすやないか。」

アナウンサー：「方言でノリツッコミ。」

アナウンサー：「大都会東京でも同じことが起きるのか。新橋でもなすを片手に、ノリツッコミの実験を行った。こちらのおっしゃれ東京都の都民は。」

取材者：「北海道の方と電話でしゃべってほしい。携帯電話がつながっています。これ携帯電話です。」〔ナスを渡す〕

東京人1（女性）：（笑）

東京人2（男性）：（笑）「え？ありえないでしょ、これ。なす？」

取材者：「携帯です。」

東京人2：「携帯じゃないですよ。若干ドン引きですよ。」（笑）「ハッハッハ。」

アナウンサー：「ドン引きされた。」

取材者：「携帯で電話つながっていますので。」〔ナスを渡す〕

東京人3（女性）：（苦笑）「いい。いいです。ちょっとこのタイプ苦手なので。すみません。」

取材者：「それでは、あのこれ携帯です。」〔ナスを渡す〕

東京人4：「えっ？（笑）それは違うよ。」

取材者：「携帯じゃないですか？」

東京人4：「なすでしょ。」

東京人5：「なすでしょ。」

(中略)

アナウンサー：「残念ながら大阪の師匠達の足元にも及ばなかった。」¹

この断片のポイントはもちろん東京の人は大阪の人と違って、ユーモアの一環として話の筋に逆らう物を渡されたら、ギャグを受け取り、ノリツッコミを言わないということである。つまり、この場合東京の人の性格やアイデンティティーは大阪の人とのダイコトミーによって定義されると言える。

このように、地域格差の中で最も世評に上る対立は何と言っても東京と大阪およびいわゆる東京人と大阪人のダイコトミーだろう。このダイコトミーは話し手の目的によって、東京対大阪、関東対関西、東日本対西日本などのさまざまな呼び名がある。比較されるのは、ユーモアのみならず、列に並んで待つ時間、エスカレータの立ち位置なども対象となるが、東京の人と大阪の人の性格は異なることが核心となるようである。

言うまでもなく、多くの場合はこのような話が、血液型性格判断と同じく雑談のためのネタという役割を果たしている偏見に過ぎないものである。あくまで論理的な主張より会話を推進する原動力が重視されると考えられる。しかしながら、火のないところに煙は立たないと言われており、日本に住めば何となく東京の人と大阪の人の性格には相違点があると必然的な結論にいたりうる。

金水（2003）は、大阪の人を連想させるステレオタイプには以下の7つのタイプがあると述べる：

1. 冗談好き、笑わせ好き、おしゃべり好き
2. けち、守銭奴、拝金主義者
3. 食通、食いしん坊
4. 派手好き
5. 好色、下品
6. ど根性
7. やくざ、暴力団、怖い

これらのステレオタイプは現実に根差しているか、あるいはただの偏見に過ぎないかという疑問はともかくとして、東京と大阪のダイコトミーを考慮に入れて考えれば、大阪の人は東京の人より冗談をいい、お金や性などに関する話をしたがるということになる。本研究は、1点目のユーモアに関して、東京と大阪の間に地域差があるのかを調査し、また、

¹ 2008年9月25日の放送より。

この差は東京の人のアイデンティティーにどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。

なぜ大阪の人は東京の人より冗談好き、笑わせ好きなのかの理由として、芸能界で影響力を及ぼす吉本興業株式会社などが拠点を大阪に置くことなどの歴史的なものも勿論考えられるが、大阪の人の性格や会話スタイル²から生まれる内部的な根拠も存在する可能性が高いという仮説も立てることができる。木部・竹田・田中・日高・三井（2013）の調査では大阪の人の方が日常会話の中でボケとツッコミ³を使うこと、および大阪の人の方が会話の中でオチの必要性を感じるようになった。

そこで、筆者は東京と大阪のダイコトミーに対する意識を測るために2013年の秋に関西在住中の関西出身の人⁴と非関西出身の280人の日本語を母語とする学部課程の大学生からアンケートに協力をいただきアンケートによる意識調査を実施し、そのうち270人のインフォーマントから有効回答を得た。アンケート調査にはインフォーマントのバックグラウンド、お笑いの好み、東京の人と大阪の人のイメージ、フリ・ボケ・ツッコミ・ノリツッコミ・オチなどについて合わせて36の項目を設けた。調査は多項選択式の問題とフリーライティングのタスクの併用で構成されている。調査結果は女性と男性、関西出身と非関西出身、私立女子大学と国立共学大学などのパラメーターに基づいて分析されたが、本稿においては関西出身と非関西出身のパラメーターのみを採用する。インフォーマントの分布は以下の表に示されている。

女性	男性	計
----	----	---

² 本稿では、関西地域の言葉遣いと結び付けられるボケ、ツッコミ、オチのような語用論的な構成要素、およびそれらに伴う「なんでやねん」などの言い回しを「関西スタイル会話」と呼ぶことにする。

³ ボケとツッコミは日本のユーモアの基礎概念だと考えられる。言うまでもなく、何が面白いにあるいは人が何に笑うかは主観的なものだが、ある文化や地域のユーモアを比較するのが研究の目的であれば、ユーモアのもっとも単純で基本的な形を抽出する必要があり、文化的なエリートではなく子供を含め、一般社会の人々が認めるものが要求される。日本の基礎概念に対して、アメリカのユーモアにおいてセットアップとパンチラインのパターンが主流である（Raskin 1984）。次のジョークはこの違いを明示する（南原2010、英語訳は筆者により）。

-オレのカミさん最高だぜ。と〜っても頭が良くて、最高に美人で、おまけに特徴的だ。
 なぜなら、喉仏が出てるからさ
 -男やんか！
 -My girl is the best. She's smart. She's very pretty. And to top things of she has a very special feature.
 A protruding Adam's apple
 ? -It's a man!

英語でのジョークはパンチラインの「A protruding Adam's apple」で終わる。それに対して、多くの日本人は「男やんか」などのようなツッコミがないと笑わない。逆に、アメリカでは「It's a man」などと言う人は一人もいないだろう。

⁴ 大阪府、兵庫県、京都府、奈良県、和歌山県、滋賀県育ちを関西出身と言い、他の都道府県育ちを非関西出身とする。

235 人	35 人	270 人
関西出身	非関西出身	
189 人	81 人	
私立女子大学	国立共学大学	
179 人	91 人	

表 1.

調査結果は、ユーモアの度合いと意識について、と東京の人と東京お笑いのイメージについてという二つの部分に分けることができる。まず、ユーモアに関しては、インフォーマントは会話の中のボケとツッコミ⁵について次のように答えた。

「会話の中でボケることがある」

	よくある	たまにある	ない
関西出身	29,6%	63,5%	6,9%
非関西出身	15,8%	62,2%	22,0%

表 2.

「会話の相手がボケたらすかさずつつこむ」⁶

	よくある	たまにある	ない
関西出身	50,2%	54,6%	4,2%
非関西出身	21,0%	61,7%	17,3%

表 3.

「あなたはどちらかというとボケる方ですか、つつこむ方ですか」

	どちらも得意	ボケる方	つつこむ方	どちらもしない
関西出身	23,3%	31,1%	37,8%	7,8%
非関西出身	17,0%	35,4%	32,9%	14,6%

表 4.

「場合に応じて、ボケたり、つつこんだり、両方できる自信ありますか」

⁵ 漫才にせよ、落語にせよ、日本のお笑いは会話（やりとり）駆動型だと言われている（大島希巳江 2013）。漫才の中では、やりとりの役割は、会話の筋から離れる面白いことを言うボケ役と、ボケを正し、話を会話の筋の戻すツッコミ役に分かれている。この役割分担およびそれぞれの役割に伴う言い回しは（特に関西では）一般の人の日常会話の中でも応用される（小矢野 2004）。

⁶ この問いは木部・竹田・田中・日高・三井(2013)により引用したものである。

	ある	ない
関西出身	59,7%	40,3%
非関西出身	37,5%	62,5%

表 5.

上の表に示されているように、関西出身のインフォーマントの方が会話の中でボケたりつっこんだりする傾向があり、場合に応じて両方できることが明らかになった。次に、インフォーマントはいくつかのシチュエーションを提示し、その場合つっこむかつっこまないかという判断を求めた。それぞれのシチュエーションの結果は以下の通りである。

「あなたは人数 25 人ぐらいのクラスの学生。授業中先生は典型的なボケを言う」

	つっこむ	つっこみたいが我慢する	つっこまない
関西出身	15,2%	47,8%	37,0%
非関西出身	11,4%	35,4%	53,2%

表 6.

「あなたは人数 25 人ぐらいのクラスの学生。授業のあと、先生と飲みに行くとき、先生は典型的なボケを言う」

	つっこむ	つっこみたいが我慢する	つっこまない
関西出身	72,3%	10,3%	17,4%
非関西出身	60,8%	6,3%	32,9%

表 7.

「あなたは友人の披露宴に参加する。その時友人のお父さんがスピーチの中で冗談を言う」

	つっこむ	つっこみたいが我慢する	つっこまない
関西出身	7,0%	45,7%	47,3%
非関西出身	3,8%	34,2%	62,0%

表 8.

「あなたは友人の結婚式の後の二次会に参加する。」

その時友人がスピーチの中で冗談を言う」

	つつこむ	つつこみたいが 我慢する	つつこまない
関西出身	46,2%	33,2%	20,7%
非関西出身	40,5%	24,1%	35,4%

表 9.

「あなたは初めて会う人たちとグループワークをする事になります。

その中で誰か冗談を言う」

	つつこむ	つつこみたいが 我慢する	つつこまない
関西出身	53,3%	17,9%	28,8%
非関西出身	39,2%	21,5%	39,2%

表 10.

「あなたは仕事の面接を受けています。面接官が冗談を言う」

	つつこむ	つつこみたいが 我慢する	つつこまない
関西出身	20,7%	35,3%	44,0%
非関西出身	16,5%	29,1%	54,4%

表 11.

どの場面においても「つつこまない」と答えた人には非関西出身の人が最も大きな割合を占めたことが分かった。さらに、生活の中の重要度に関しては次のような結果が得られた。

「会話にオチが必要だと思う」

	思う	思わない
関西出身	71,8%	28,2%
非関西出身	45,1%	54,9

表 12.

「ちょっとした失敗は話のネタにする」⁷

	よくある	たまにある	ない
関西出身	78,8%	20,6%	0,5%
非関西出身	61,0%	37,8%	1,2%

表 13.

「関西出身の人と話す時に、会話の中『つつこみ』や『オチ』を求めますか」

	求める	どちらも言えない	求めない
関西出身	52,5%	37,7%	9,8%
非関西出身	21,5%	35,4%	43,0%

表 14.

「関西出身以外の人と話す時に、会話の中『つつこみ』や『オチ』を求めますか」

	求める	どちらも言えない	求めない
関西出身	20,2%	44,3%	35,5%
非関西出身	6,3%	40,5%	53,1%

表 15.

「あなたの日常生活において、笑いがどれだけ重要ですか」

	とても重要	重要	ある程度重要	あってもなくてもいい程度
関西出身	42,6%	33,3%	23,0%	1,1%
非関西出身	29,9%	29,9%	32,5%	7,8%

表 16.

オチに関しては、関西出身のインフォーマントは会話の中のオチを重要なことだと考えることが明らかになったが、表 15 から関西出身のインフォーマントは関西出身以外の人との会話の中『つつこみ』や『オチ』を求めないことが分かった。

フリーライティングの項目や追跡インタビューにおいて、東京の人はボケやツッコミについてどう思うかを詳しく尋ねると、インフォーマントをいわゆる大阪スタイルお笑いに関心を持っているグループと関心を持っていないグループに分けられる。東京の人は言うまでもなくお笑いのルールを良く知っているが、ボケ・ツッコミに参加したくても、自信がない場合が多いという。つまり受動的な知識を持っていると考えられる。一方、一部の東京の人にとってボケ・ツッコミのやり取りが面白くなく、参加する興味もないという。

加えて、ユーモアは大阪と東京のダイコトミーを成しているのなら、東京のお笑いは具

⁷ この問いは木部・竹田・田中・日高・三井(2013)により引用したものである。

体的にどのような特徴を持っているだろうか。インフォーマントに「東京のお笑いほどの特徴を持っているか」の問いに対するもっとも多くの答えを以下の表にまとめた。

東京のユーモアの特徴			
非関西出身	人数	関西出身	人数
シュール	8	知的、理論的	9
決まったネタをいう、決めセリフ	8	品がある、上品	8
あっさり、落ち着いている	7	冷静	7
スマート、おっしゃれ	7	一発芸	7
知的、理論的	6	シュール	6
流行りに敏感、新しさを求める	4	話の内容、トークで笑を取る	5
計算高い、計画的	4	決まったネタをいう、決めセリフ	5
ひかえめ	3	あっさり、落ち着いている	5
コント	3	スマート、おっしゃれ	5
品がある、上品	3	ブラックジョーク、皮肉	3
やりとりが早い	3	コント	2
芸が細かい	2	モノマネ	2
優しい	2		
道具を使う	2		

表 17.

何となく、東京のユーモアのイメージが出来あがると言える。ボケ・オチ・ツッコミに基づいている一般的に日本の笑いとされている会話駆動型の大阪の笑いに対して、東京の笑いは品があり、知的であり、落ち着いているという。一方決まったネタや一発芸を東京のユーモアと結び付ける人も多く見られた。このダイコトミーが東京の人のアイデンティティーにも反映されていると考えられる。次に東京の人のイメージについて尋ねたとき、次のような結果を得た⁸。

⁸ 偏った判断を最小限にするために、お笑いの問いの前に東京の人のイメージについて質問を行った。

東京の人のイメージ			
非関西出身	人数	関西出身	人数 ⁹
冷たい	15	冷たい	44
標準、標準語	9	標準、標準語	22
忙しい、急いでいる	8	静か、大人しい	14
クール	7	あっさり、落ち着いている	9
冷静	6	まじめ	9
おしゃれ、スタイリッシュ	4	おしゃれ、スタイリッシュ	8
流行に関心を持っている	4	冷静	8
まじめ	4	かたい	7
上品、マナーが良い	3	流行に関心を持っている	5
プライドが高い	3	プライドが高い	5
知的	2	忙しい、急いでいる	4
あっさり、落ち着いている	2	クール	4
スマート	2	こわい	3
		上品、マナーが良い	2
		知的	2
		きっちりしている	2

表 18.

やはり東京の人のイメージの特徴として、冷たい、冷静、クールのようなものが目立っている。これは大阪の人の笑わせ好き、おしゃべり好きのイメージの対立からできる特徴だと考えられる。

本調査の結果をまとめると、インフォーマントのサンプルサイズが小さいにも関わらず、いくつかの傾向が明らかになった。やはり、関西出身のインフォーマントは非関西出身のインフォーマントに比べて、ボケもしくはツッコミを言う頻度が高く、目上の人やパワーが高い人に対してツッコミを言う抵抗が少ないことが明らかになった。大阪の人はキャラによってボケ・ツッコミの役割分担が通常決まっているが、状況に応じて多くの人はどちらの役も演じることができるという。一方東京の多くの人はお笑いのルールを良く知っているが、ボケ・ツッコミに参加したくても、自信がない場合が多いことが分かった。言い換えれば、ボケ・ツッコミなどのスキルを習得するのはだれにとっても可能だが、大阪（あるいは関西）に住まないとな動的な知識が得られにくいと思われる。

このようにユーモアを分析してみれば、地域さが見られ、さらにそれに基づいて大阪の人のアイデンティティを簡潔に定着できると考えられる。それに対して、東京に行き、

⁹ 非関西出身のインフォーマントのサンプルの方が大きい。表 1.を参照。

東京の集団アイデンティティを調査するのは比較的困難だろう。これは、現代東京のアイデンティティは、東京以外の地域のアイデンティティとの対立から成り立っているからだと主張したい。言い換えれば、東京の人はさまざまな面において日本の標準の役割を果たしている。対立しているからこそ、この状態を最も保つのは大阪と関西の文化と言語と言えるのではないだろうか。

参考文献

木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ編著 2013『方言学入門』三省堂

金水敏 2003『ヴァーチャル日本語:役割語の謎』岩波書店

小矢野哲夫 2004「大阪的談話の特徴一ボケとツッコミー」『日本語学 23(11)』明治書院、42-52

南原清隆 2010『僕の「日本人の笑」再発見：狂言でござる』祥伝社

大島希巳江 2013『やってみよう! 教室で英語落語』三省堂

Raskin, V. 1984. *Semantic Mechanisms of Humor*. Springer.